自尊感情の変動性が大学生の被害妄想的観念に及ぼす影響

The influence of instability of self-esteem on persecutory ideation in university students

諏訪 典子[1] Noriko SUWA
緒賀 郷志（岐阜大学教育学部）Satoshi OGA

要約

本研究では，大学生156名（男性44名，女性112名）に対し，質問紙調査を行い，自尊感情の高さおよび自尊感情の変動性と被害妄想的観念との関連を検討した。その結果，自尊感情の高さにおいてのみ性差が認められ，女性よりも男性の自尊感情が高いことが示された。このことから男女別に自尊感情の高さ得点と自尊感情の変動性得点を用いたクラスタ分析による群分けを行い，被害妄想的観念に対してクラスカル・ウォリス検定を行った。その結果，男性においては自尊感情が低くかつ安定している人が被害妄想的観念における苦痛度が高く，女性においては自尊感情が低くかつ不安定な人が被害妄想的観念における苦痛度が高いことが示され，性差によって自尊感情の変動性が被害妄想的観念に及ぼす影響は異なっていることが示され，女性は自己を脅かす出来事や思考・感情が起こった際に，自己評価の維持が不可能となり自尊感情が低下・変動した結果，そのような脅威は他者のせいであると捉え，自己を守るために被害妄想的観念を抱くことが考えられた。またその観念が顕在化した苦痛となる際には自尊感情のあり方が影響しているとの知見が得られた。

キーワード：自尊感情の変動性（instability of self-esteem）被害妄想的観念（persecutory ideation）学生（university students）

問題と目的

妄想とは統合失調症などの精神疾患においてみられる症状の1つであり，DSM-Ⅳ-TR（American Psychiatric Association, 2000）によると“外的現実に対する間違った推論に基づく誤った確信であり，その矛盾を他のほとんどの人が確信しており，矛盾に対して反論の余地のない明らかな証明や証拠があるにもかかわらず，強固に維持される”と定義されている。この定義はJaspers（1913）の古典的な定義に基づいている。彼は心理学的に了解できない“真正妄想”と了解可能な“妄想様観念”とに分け，前者は統合失調症に特有であるとし，後者はうつ状態や躁状態の妄想，健常者にもみられる支配観念が含まれるとした。この区分により，これまでは統合失調症の真正妄想と統合失調症以外の妄想様観念は質的に異なるものとされ，非連続性が強調されてきた。

しかし最近の研究では，一般青年においても妄想に似た現象が見られると報告されている（Fenigstein & Vanable, 1992；丹野・石垣・杉浦, 2000）。このため，この区分を用いずに統合失調症の妄想から健常者の支配観念までを連続するスペクトラムとして捉える研究者も多い（笠原・藤縄, 1978）。現在でも連続的に捉えるべきか，非連続的に捉えるべきかの議論は重ねられているが，本研究では妄想の発生メカニズムについて健常者を対象に研究することが可能となり，さらに精神疾患の治療に新たな手がかりをもたらす可能性のある連続性を仮定するパラノイア・スペクトラム説の立場をとる。

さて，妄想には被害妄想や誇大妄想，微小妄想などの様々な内容のものがある。その中でも特に被害妄想が，その体験率の高さや暴力などの行動化しやすさの点で多くの問題を生じさせると考えられている（Appelbaum, Robbins, & Monahan, 2000）。その点を踏まえると，健常者にみられる被害的な内容の妄想に似た観念（以下，被害妄想的観念）においても同様に多くの問題と関連があると考えられる。被害妄想的観念とはDSM-Ⅳ-TR（APA, 2000）において，妄想様観念；paranoid ideation“妄想ほどの強さはない観念で，自分が苦しめられている，迫害されている，または不当に扱われているとい

1）岐阜大学大学院教育学研究科平成23年度修了生

う疑念または確信を伴っているもの”と定義されたものと同等なものである。しかし妄想様観念という表現では，その内容が被害的なものを扱っているということが伝わりにくいため，被害妄想的観念という用語がしばしば使用されている（森本・丹野・坂本・石垣, 2002)。

被害妄想的観念の測定尺度としては，Fenigstein & Vanable（1992）による，健常者のパラノイア傾向（他者の思考や行動が自分に向けられたものとして誤解もしくは過大視する傾向）を測定するパラノイア尺度があり，これまで被害妄想的観念の研究にはこのパラノイア尺度が広く用いられてきた（Freeman, Garety, Bebbington, Smith, Robbinson, Fowler, Kuipers, Ray, & Duun, 2005)。しかし，近年パラノイア尺度を用いて被害妄想的観念を測定することの問題点が指摘されてきている。その1つ目の問題点は項目の不適切さである。パラノイア尺度には“人はよく私を失望させる”に代表されるような被害的な内容とは言い難い項目が多数含まれている（Freeman et al., 2005)。さらに２つ目の問題点は多次元的測定が欠如している点である。Peters, Joseph, & Garety（1999）は，妄想患者と健常者の双方に多次元尺度であるピーターズ妄想質問紙（以下，PDIとする）を実施し，患者の妄想は健常者よりも苦痛度が強く，心的占有度（考える頻度）が高かったことを報告し，その上で妄想的な観念を多角的に捉えること，および健常者の妄想様観念と臨床群の妄想との相違を明らかにすることの重要性を指摘した。また，山崎（2006）は，統合失調症患者と健常者の双方にPDIを実施し，いずれの群においても心的占有度と苦痛度の間には正の相関が認められたことを報告する一方，統合失調症患者では確信度の強さが苦痛度の強さに影響していることを示唆した。以上のように多次元尺度での測定が妄想的観念の測定には必要だと考えられる。

そこでFreeman et al.（2005）は，パラノイア尺度の２つの問題点を克服する，健常者の被害妄想的観念を測定する質問紙the Paranoia Checklistを作成した。この尺度は心的占有度・確信度・苦痛度の３次元からなる尺度であり，山内・須藤・丹野（2007）によって日本語版Paranoia Checklistとして翻訳され，信頼性および妥当性を備えていることが示されている。そこで，本研究ではこの日本語版Paranoia Checklistを用いて研究を行うこととした。

さて，被害妄想の発生要因として，自尊感情の高さが関連しているという報告がある。Bentall, Kaney, & Dewey（1991）やBentall, Corcoran, Howard, Blackwood, & Kinderman（2001）は被害妄想患者を対象にその発生研究を行い，被害妄想は自尊感情の低い者が自己についてのネガティブな思考や感情から自分を守るための機能として発達した認知バイアスの結果であることを示した。しかしLyon, Kaney, & Bentall（1994）は，被害妄想患者は必ずしも自尊感情が低くはないことを示した。これらの研究から，被害妄想の発生要因として自尊感情の低さだけがあるとは言い難い。

なお，自尊感情に関しての近年の議論では，高低の次元だけではなく安定性（stability）－変動性（instability）の次元を考慮すべきであるという指摘がなされている（中間・小塩, 2007 ; Thewissen, Bentall, Lecomte, van Os, & Myin-Germeys, 2008)。Thewissen et al.（2008）は，１日10回，６日間の自尊感情の測定を行うことにより自尊感情の変動性を測定し，被害妄想的観念の発生には自尊感情の低さだけでなく，その変動性によっても予測されることを示した。しかし彼らは，被害妄想的観念を多次元尺度ではないパラノイア尺度で測定していた。そこで，Raes & van Gucht（2009）はthe Paranoia Checklistを用いて被害妄想的観念を測定し，自尊感情の高さおよびその変動性との関連を検討し，被害妄想的観念の確信度や苦痛度が自尊感情の変動性によって最もよく説明されることを明らかにした。この結果について彼らは，自己を脅かす思考や感情が起こった際に，自己評価を維持することができずに自尊感情が低下した結果，被害妄想的観念という自己を脅威から守るための機能を作り，その機能を強化するためにその観念を強く確信することで，確信度が高くなると説明した。しかしRaes & van Gucht（2009）の研究では，自尊感情の変動性

を“自分自身が変動しやすいという傾向を認識していますか”などの4項目について5件法で回答を求めたのみであり，現実の自尊感情の変動を測定していたとは言い難い。Thewissen et al.（2008）が実施したように，その日の出来事や状況などに応じてさまざまに変動する自尊感情は，複数回の測定を行い，その変動性を測定される必要があるといえよう。

そこで本研究ではThewissen et al.（2008）とRaes & van Gucht（2009）の研究における問題点を克服し，自尊感情の測定を1日1回7日間行い，その期間の揺れ幅でもって自尊感情の変動性を測定し，その上で自尊感情の変動性，そして自尊感情の高さが被害妄想的観念の発生にどのように影響しているのかを検討することを目的とした。

また，自尊感情の研究では自尊感情と他の心理的特徴との関連と同時に性差との関連も検討されてきた（加藤・斉藤・瀧野，1987；佐久間・無藤，2003；塗師，2005）。それによると女性は男性よりも自尊感情が低く，その理由として性役割の適合や学校の影響，身体的魅力などが挙げられている（東・岩崎・小林，2002）。しかしながら自尊感情の変動性における性差の検討の報告は見当たらない。

したがって，本研究では被害妄想的観念の発生要因として，自尊感情の高さおよび自尊感情の変動性を扱い，これらの関連に性差を含め検討することを目的とした。

方法

調査協力者：調査1において4年制大学に通う大学生397名に質問紙Ⅰ（自尊感情尺度）を配布し，7日間後の調査2において質問紙Ⅱ（被害妄想的観念尺度）を配布した。質問紙Ⅰ・Ⅱともに記入を行った192名（回収率48.4%）のうち，欠損値や回答に不備のある者を除いた156名を分析対象者（有効回答者39.3%）とした（男性44名女性112名，平均年齢19.1±1.03歳）。

調査時期：2011年6月下旬～7月初旬

手続き：調査は2つの段階に分けて行った。調査1では講義の時間に質問紙Ⅰへの記入を教示・実施し，その日の夜から7日間，毎晩就寝時に質問紙Ⅰに記入するように求めた。調査2では調査1で配布した質問紙Ⅰの回収と質問紙Ⅱへの記入を求めた。なお，調査1と調査2における調査協力者の照合はあらかじめ調査1の質問紙Ⅰに記載しておいた3桁の数字を調査2の質問紙Ⅱに記載してもらうことで行った。

質問紙の構成：

・質問紙Ⅰ…基本属性（学年・年齢・性別）と自尊感情を測定する項目

状態自尊感情尺度（阿部・今野，2007）を用いた。これは日常生活の出来事などに対応して変動する自尊感情を測定する尺度で9項目（例：いま，自分に対して肯定的であると感じる）の1因子構造で構成されている。調査協力者には1ページに1日分の自尊感情尺度が記載されている冊子を配布し，講義時に記入の練習として1日分の回答をさせた。その後，毎晩就寝前にその日の分の自尊感情尺度を7日間連続して記入するよう教示した。各項目について，「いま」この瞬間に考えていることが自分にどの程度あてはまるか，“1；あてはまらない”，“2；どちらかというとあてはまらない”，“3；どちらともいえない”，“4；どちらかというとあてはまる”，“5；あてはまる”の5件法で回答を求めた。

・質問紙Ⅱ…基本属性と被害妄想的観念を測定する項目

日本語版Paranoia Checklistを用いた（山内ら，2007）。これは健常者の被害妄想的観念を心的占有度（どのくらい頻繁に考えるか），確信度（どのくらい強く確信しているか），苦痛度（どのくらい苦痛か）の3次元から捉えることができる尺度であり，17項目（例：他人が私に対して敵意を抱いているだろう）の1因子構造で構成されている。本研究では，Raes & van Gucht（2009）の自尊感情の変動性によって被害妄想的観念の確信度と苦痛度が説明されたという知見から，被害妄想的観念の測定を確信度・苦痛度の2次元のみで測定することとした。各項目について，どのくらい自分にあてはまるかを確信度においては“1；思わない”，“2；やや思う”，“3；ある程度思う”，“4；かなり思う”，“5；確かに思う”の5件法で，苦痛度におい

ては“1；苦痛でない”，“2；やや苦痛である”“3；ある程度苦痛である”，“4；かなり苦痛である”，“5；非常に苦痛である”の５件法で回答を求めた。

結果

以下の調査結果についてはR 2.13.1を用いて分析を行った。

1. 各尺度の構成

状態自尊感情尺度：全９項目について“あてはまらない”から“あてはまる”を１点－５点として得点化し，主成分分析を行った結果，固有値は第１固有値から5.00, 0.92, 0.71, …であり，第１主成分の寄与率は50.2%であった。このことから阿部・今野（2007）と同様に１因子構造であると判断した。この９項目からなる尺度のα係数は .90であった。また，逆転項目の処理を行った上で，その合計得点を自尊感情得点とした。その上で，分析対象者ごとに７日間の自尊感情得点の個人内平均値および個人内標準偏差を算出し，それらを自尊感情の高さ得点（*M*=29.7, *SD*=6.07），自尊感情の変動性得点（*M*=2.7, *SD*=1.85）とした（Table 1）。なお，自尊感情の変動性は値が高いほど自尊感情が不安定であることを示す。

日本語版Paranoia Checklist：全17項目について，確信度では“思わない”から“確かに思う”を１点－５点として，苦痛度では“苦痛でない”から“非常に苦痛である”を１点－５点として得点化した。次に，確信度における各項目の分布を確認したところ，第１項目（私は他人に対して用心している必要がある）と第２項目（私についての悪い評判が広まっているかもしれない）は正規分布し，第６項目（他人がそれとなく私について話し合っている）と第15項目（他人が私のことを笑っている）は２点が一番高くなり，残りの13項目とは異なる分布をしていた。これらの項目内容を検討したところ，この４つの項目は本研究における被害妄想的観念の定義である，迫害されている，不当に扱われているという疑念または確信を伴っているものというよりは，一般的な不安を測定している度合いが大きいと考えられたため，これら４つの項目は被害妄想的観念の測定にそぐわないと判断し，分析から削除した。なお，苦痛度においても同様の理由で同じ４項目を分析から削除した。その上で，確信度のデータにおいて主成分分析を行ったところ，固有値の変化は6.00, 2.04, 1.09, 0.72,…であり，第１主成分の寄与率は41.8%であった。第１固有値と第２固有値の間の変化が大きいことから山内ら（2007）と同様に１因子構造であると判断した。この13項目からなる尺度のα係数は .90であった。そこで13項目の素点合計を確信度得点（*M*=18.6, *SD*=7.35）とした（Table 1）。苦痛度のデータにおいて主成分分析を行ったところ，固有値の変化は8.43, 1.37, 0.67,…であり，第１主成分の寄与率は61.9%であった。このことから１因子構造が妥当であると判断した。この13項目からなる尺度のα係数は .95であった。そこで13項目の素点合計を確信度得点（*M*=22.0, *SD*=12.2）とした。確信度得点のヒストグラムをFigure 1に，苦痛度得点のヒストグラムをFigure 2に示す。

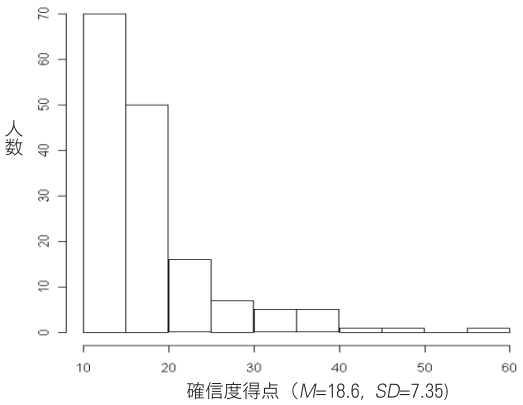

Figure 1　確信度得点のヒストグラム

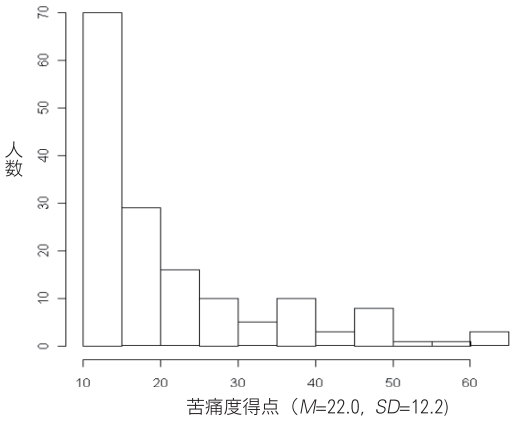

Figure 2　苦痛度得点のヒストグラム

Table 1　男女別の平均と中央値，*SD* および *t* 検定・クラスカル・ウォリス検定の結果

	全体（156名）		男性(44名)			女性（112名）				
	M	*SD*	*M*	*SD*	中央値	*M*	*SD*	中央値	*t* 値（χ^2値）	*Pr*
自尊感情の高さ	29.7	6.07	31.5	7.03		29.0	5.53		2.34	$p<.05$
自尊感情の変動性	2.70	1.85	2.27	1.69		2.85	1.89		1.74	$p=.08$
確信度	18.6	7.35	19.3	7.19	16.0	18.3	7.42	16.0	0.44	$p=.51$
苦痛度	22.2	12.2	21.6	11.98	15.5	22.2	12.39	16.5	0.51	$p=.47$

2. 性差の検討

分析に用いられる変数について，男女差の検討のため，*t*検定を行った（Table 1）。なお，被害妄想的観念における確信度得点と苦痛度得点は分布が正規分布から逸脱していたため（Figure 1，Figure 2），クラスカル・ウォリス検定を行った。その結果，自尊感情の高さにおいて女性よりも男性の自尊感情が有意に高いことが示された（$t(154)=2.34$，$p<.05$）。このことから，以降の分析は男女別に行った。

3. 各変数間の関連

各変数間の関連を検討するために，男女それぞれの相関係数（スピアマンの順位相関）を算出した（Table 2，Table 3）。その結果，男性においては確信度と苦痛度との間に強い正の相関を（$r=.57$，$p<.001$），自尊感情の高さと苦痛度の間に弱い負の相関を（$r=-.26$，n.s.）示した。女性においては確信度と苦痛度の間に強い正の相関を（$r=.63$，$p<.001$），自尊感情の高さと確信度の間に弱い負の相関を（$r=-.27$，$p<.01$），自尊感情の高さと苦痛度の間に弱い負の相関を（$r=-.23$，$p<.05$）示した。

Table 2　男性における各変数間の相関係数

	自尊感情の高さ	自尊感情の変動性	確信度
自尊感情の変動性	-.03		
確信度	-.12	-.21	
苦痛度	-.26	-.07	.57 ***

n=44　　***$p<.001$ **$p<.01$ *$p<.05$

Table 3　女性における各変数間の相関係数

	自尊感情の高さ	自尊感情の変動性	確信度
自尊感情の変動性	-.13		
確信度	-.27 **	.12	
苦痛度	-.23 *	.16	.63 ***

n=112　　***$p<.001$ **$p<.01$ *$p<.05$

4. 自尊感情の高さおよび自尊感情の変動性と被害妄想的観念との関連

男性：自尊感情の高さ得点と自尊感情の変動性得点を標準化した上で，階層的クラスタ分析（平方ユークリッド距離，Ward法）を行った。その結果，３つのクラスタが得られた（Table 4）。各クラスタ間に有意な差があるかを検討するために一要因分散分析を行った結果，自尊感情の高さ・自尊感情の変動性のいずれにおいても0.1%水準で有意な差が認められた（自尊感情の高さ：$F(2,41)=33.70$，$p<.001$，自尊感情の変動性：$F(2,41)=28.48$，$p<.001$）。TukeyのHSD法（５%の有意水準）による多重比較を行ったところ，自尊感情の高さではクラスタ１＞クラスタ２＝クラスタ３，自尊感情の変動性ではクラスタ２＞クラスタ１＝クラスタ３という結果であった。クラスタ１は自尊感情の高さ得点が高く，自尊感情の変動性得点が低い，すなわち自尊感情が高く，安定しているため「高・安定」群とした。クラスタ２は自尊感情の高さ得点が低く，自尊感情の変動性得点が高い，すなわち自尊感情が低く，不安定であるため「低・不安定」群，クラスタ３は自尊感情の高さ得点が低く，自尊感情の変動性得点が低い，すなわち自尊感情が低く，安定しているため「低・安定」群とした。クラスタ分析により得られた３つの群において被害妄想的観念に差が有るかを検討するため，クラスカル・ウォリス検定を行った（Table 6）。なお，その際，青木（2009）のRの関数を使用した。その結果，苦痛度において有意な差が認められた（$\chi^2(2)=8.78$，$p<.05$）。Scheffe法の多重比較（５%の有意水準）では，「高・安定」群と「低・安定」群との間に有意な差が認められた。

Table 4　男性における各クラスタでの自尊感情の平均とSDおよび分散分析の結果

	クラスタ1（20名）「高・安定」群		クラスタ2(6名)「低・不安定」群		クラスタ3（18名）「低・安定」群				
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*F*値	*Pr*	多重比較
自尊感情の高さ	37.4	3.91	28.8	3.70	25.8	5.12	33.70	$p<.001$	1>2=3
自尊感情の変動性	1.89	1.30	5.47	0.77	1.64	0.99	28.48	$p<.001$	2>1=3

Table 5　女性における各クラスタでの自尊感情の平均とSDおよび分散分析の結果

	クラスタ1（13名）「高・安定」群		クラスタ2(41名)「中・中」群		クラスタ3（51名）「低・安定」群		クラスタ4（7名）「低・不安定」群				
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*F*値	*Pr*	多重比較
自尊感情の高さ	40.0	2.91	29.5	3.13	26.2	4.09	26.0	2.27	53.58	$p<.001$	1>2>3=4
自尊感情の変動性	1.57	0.94	3.75	1.03	1.73	0.74	8.00	1.35	118.70	$p<.001$	4>2=1=3

女性：男性と同様に，自尊感情の高さ得点と自尊感情の変動性得点を標準化し，階層的クラスタ分析（平方ユークリッド距離，Ward法）を行ったところ４つのクラスタが得られた(Table５)。各クラスタ間に有意な差があるかを検討するために一要因分散分析を行った結果，自尊感情の高さ・自尊感情の変動性のいずれにおいても0.1%水準で有意な差が認められた（自尊感情の高さ：$F(3,108)=51.58$, $p<.001$，自尊感情の変動性：$F(3,108)=118.7$, $p<.001$)。TukeyのHSD法（５%の有意水準）による多重比較を行ったところ，自尊感情の高さではクラスタ１＞クラスタ２＞クラスタ３＝クラスタ４，自尊感情の変動性ではクラスタ４＞クラスタ２＞クラスタ１＝クラスタ３という結果であった。クラスタ１は自尊感情の高さ得点が高く，自尊感情の変動性得点が低い，すなわち自尊感情が高く，安定しているため「高・安定」群，クラスタ２は自尊感情の高さ得点が中程度，自尊感情の変動性得点が中程度であり，自尊感情の高さが中程度，変動性も中程度であることから「中・中」群，クラスタ３は自尊感情の高さ得点が低く，自尊感情の変動性得点が低い，すなわち自尊感情が低く，安定しているため「低・安定」群，クラスタ４は自尊感情の高さ得点が低く，自尊感情の変動性得点が高い，すなわち自尊感情が高く，不安定であるため「低・不安定」群とした。クラスタ分析により得られた４つの群において被害妄想的観念に差が有るかを検討するため，クラスカル・ウォリス検定を行った(Table７)。その結果，苦痛度において有意な差が認められた（$\chi^2(3)=8.90$, $p<.05$)。Scheffe法の多重比較（５%の有意水準）では，「高・安定」群と「低・不安定」群との間に有意な差が認められた。

Table 6　男性における各クラスタでの被害妄想的観念の中央値およびクラスカル・ウォリス検定の結果

	クラスタ1（20名）「高・安定」群	クラスタ2(6名)「低・不安定」群	クラスタ3（18名）「低・安定」群			
	中央値	中央値	中央値	χ^2値	*Pr*	多重比較
確信度	15.0	16.0	17.0	1.77	$p=.414$	1=2=3
苦痛度	13.0	18.5	20.5	8.78	$p<.05$	3>1=2

Table 7　女性における各クラスタでの被害妄想的観念の中央値およびクラスカル・ウォリス検定の結果

	クラスタ1（13名）「高・安定」群	クラスタ2（41名）「中・中」群	クラスタ3（51名）「低・安定」群	クラスタ4（7名）「低・不安定」群			
	中央値	中央値	中央値	中央値	χ^2値	*Pr*	多重比較
確信度	14.0	16.0	16.0	19.0	2.86	$p=.413$	1=2=3=4
苦痛度	14.0	17.0	16.0	32.0	8.9	$p<.05$	4>1=2=3

考察

1. 性差に関する検討

自尊感情の高さ得点と自尊感情の変動性得点，被害妄想的観念における苦痛度得点と確信度得点の４つにおいて，有意な男女差が認められたのは自尊感情の高さのみであり，女性よりも男性の自尊感情が高いことが示された（Table１）。

このように自尊感情の高さにおいて性差が認められたのは加藤ら（1987）や東ら（2002），塗師（2005），佐久間・無藤（2003）と同様の結果であった。東ら（2002）は，自尊感情において性差が認められる要因としていくつか挙げ，そのなかでも性役割適合の要因として，自信（Self-confidence）は男性的な特徴としてステレオタイプ化されているとした。そのため男性が自信をもつことを期待されるのに対し，女性が自信をもつことは伝統的に性役割に反すると述べている。また身体的魅力の要因として，女性は男性よりも自分たちの容姿や身体に関して一貫してより大きな不満があるという点から，女性は女性の体に関する文化的な基準を内在化し，その基準に対し自分を評価した結果として身体的評価が低くなり，このことが低い自尊感情と結びつくとしている。これらのことから，男性においては自信をもつことがよいとするステレオタイプ化された特徴が自尊感情の高さに反映されたと考えられる。また女性においては性役割だけでなく，大学という同年代の同性・異性が多く集まる場で日常生活を送ることによって，頻繁に容姿や身体などの評価が行われることが自尊感情の低さに現れたと考えられる。

また，男女別で算出した各変数間の相関では，男性においては自尊感情の高さと苦痛度との間に弱い負の相関が，女性においては自尊感情の高さと確信度，苦痛度との間に有意な弱い負の相関が認められた（Table２，Table３）。これにより，確信度得点・苦痛度得点の高さには男女差は認められなかったものの，男性では自尊感情の高さと苦痛度との間にのみ負の関連があることが，女性では自尊感情の高さと確信度，苦痛度との間の双方に負の関連があることが示された。

この男女における関連性の違いは，Bentall et al.（1991）とRaes & van Gucht（2009）の知見に基づいて考えることができる。Bentall et al.（1991）は，被害妄想は自尊感情の低い者が自己についてのネガティブな思考や感情から自分を守るための機能として発達した，認知バイアスの結果であると説明し，Raes & van Gucht（2009）は，自己を脅かす思考や感情が起こった際に，自己評価の維持ができずに自尊感情が低下した結果，自己を脅威から守る機能として被害妄想的観念を作り，その機能を強化するためにその観念を強く確信することで確信度が高くなると説明した。本研究の結果と上記の説明に基づいて考えると以下のように考えられる。

女性は男性に比べて自尊感情が低く，自己に対する評価が低い。そのため自分の評価をより一層引き下げる可能性のある，自分にとってネガティブな思考や感情を受け入れることは，さらなる自尊感情の低下を引き起こしてしまう危険性がある。そこで，それらから自分自身を防衛するために被害妄想的観念を強く抱くと考えられる。言い換えれば，被害妄想的観念を抱くことによって今以上に自尊感情が低下することや自己を価値のない人間として受け入れることを避け，自己についてのネガティブな思考や感情は他者によってもたらされたもの，他者が自分に与えたものとして認知するのである。そして，それら観念を強く確信することによって低い自尊感情をさらに下げることなく維持していると考えられる。しかし，実際に被害妄想的観念を抱く場合，それが自分自身を脅威から守るためであるとは意識せず，単に他人によって害を被られていると確信する。さらにその観念を強く抱くほど，それが他者から害を与えられていると認知するため，そこに苦痛を感じる。女性において自尊感情の高さと確信度，苦痛度との間に有意な弱い負の相関が認められた理由はこのように考えられる。

ただし，一方で，被害妄想的観念を抱くことで自尊感情が低くなるという可能性も考えられることも忘れてはならない。他者から不当に扱われている，苦しめられているといった疑念を抱くことによって，自分は人から卑しめられる

価値のない人間であると評価した結果，自尊感情が低くなることも考えられる。

男女ともに被害妄想的観念における苦痛度が自尊感情の高さと負の関連が示されたことについては，自己についてのネガティブな思考や感情が他者によってもたらされたものとして捉え，“周りの人がこんなにも自分を苦しめる”というように，その苦痛をより感じることで，自己の評価が脅かされている事実から目を逸らし，自己の評価を維持していると考えられる。したがってこれは，自分が不当に扱われている，苦しめられているといった疑念を苦痛に感じることで，自己の評価の低下から目を逸らし，自尊感情の維持を行っていることが考えられた。また逆に，被害妄想的観念自体がその人の評価を下げかねるものであるため，自尊感情の低い人は相手に不当に扱われている，敵意を抱いているといった疑念に対して苦痛をより強く感じることも考えられよう。

状態自尊感情の変動性において，有意な男女差は認められなかった。状態自尊感情は“現時点の自分に対して感じる全体的評価であり，日常生活の出来事などに対応して変動するもの”であるため，日々の出来事によって自己の評価が変動することは，性差や，また状態自尊感情の平均した高さにも関係なく起こりうるものと考えられる。

自尊感情の変動性と被害妄想的観念における確信度・苦痛度との間だけにおいては男女ともに有意な相関は認められず，Raes & van Gucht（2009）の研究とは異なる結果となった。この理由として，本研究ではRaes & van Guchtとは異なり，Thewissen et al.（2008）の手法を踏襲し，7日間の測定を行い自尊感情の変動性を得点化したことが考えられる。Raes & van Guchtの研究の測定方法では，自分自身で変動しやすいと感じている場合でも，実際にはさほど変動していないことが考えられ，その結果として有意な相関がそこに見られた可能性がある。一方，Thewissen et al.（2008）が示したように，被害妄想的観念の強さには，自尊感情の高さが考慮されたうえで，その変動性が有意な説明要因となっていたため，そのことを次に考察する。

2. 自尊感情の高さおよび自尊感情の変動性と被害妄想的観念との関連

クラスタ分析により，男性においては，自尊感情が高くかつ安定している「高・安定」群，自尊感情が低くかつ安定している「低・安定」群，自尊感情が低くかつ不安定な「低・不安定」群の3群に分類され，女性においては，自尊感情が高くかつ安定している「高・安定」群，自尊感情の高さ・変動性ともに中程度の「中・中」群，自尊感情が低くかつ安定している「低・安定」群，自尊感情が低くかつ不安定な「低・不安定」群の４群に分類された。このように男女いずれにおいても，自尊感情が高くかつ不安定な人，すなわち「高・不安定」群は本研究においては認められなかった。これは自尊感情の高い人は，普段から自己に対する肯定的な感情を抱くことや自分を価値ある人間として捉えることができているために，日常生活において自己を揺るがすような出来事に遭っても揺らぐ幅は狭く，自己の評価を一定して維持することができることが考えられる。あるいは，本研究が7日間に渡る調査であったため，途中で回答をやめ，分析から除外された協力者の中に「高・不安定」群が含まれていた可能性も考えられる。自尊感情が高くかつ不安定な人は，自己に対する評価が高いため，毎晩の回答に意味を見出せないことや，その変動性が大きいため，回答に積極的になれない日があった可能性が考えられる。

自尊感情の高さおよび自尊感情の変動性と被害妄想的観念との関連において，男性では「低・安定」群は「高・安定」群に比べて有意に苦痛度得点が高いことが，女性では「低・不安定」群は「高・安定」群に比べて有意に苦痛度得点が高いことが認められた（Table６，Table７）。すなわち男女いずれにおいても「高・安定」群は有意に苦痛度得点が低いことが示された。しかし，有意に苦痛度得点が高い群は，自尊感情が同じように低くても男性においては自尊感情の変動が小さい「低・安定」群であり，女性においては自尊感情の変動が大きい「低・不安定」群であった。

男性において，自尊感情が低くかつ安定した人は，自尊感情が低いため，自分の評価をさらに引き下げうる自分にとってのネガティブな思考や感情を受け入れることは恐怖心を強めるものであろう。そのため，そのような自己を脅かす思考や感情は他者によってもたらされたものとして認知することを行い，その結果として被害妄想的観念が高くなると考えられる。しかも自尊感情が安定しているということは，自己の評価を変化させるような，さまざま出来事に遭遇しても自尊感情はさほど変動しないということである。そのため“自分は所詮この程度の人間である”“満足はいかないがこれが自分だ”という自己の評価が確立されてしまい，たとえ自己を高めてもおかしくない肯定的な体験があったとしても，自分を価値ある存在として肯定的に捉えることがなく，自尊感情は低いままである。そうではあっても，さらなる自己の評価の低下は，“自分はやっぱりだめなのだ”，“自分は価値のない人間だ”ということが意識されることとなり苦痛である。そのため，評価の維持をする際に被害妄想的観念を抱くことによって，ネガティブな思考や考えを受け入れられないでいると考えられる。

女性においては，自尊感情が低くかつ不安定な人は，自尊感情が低いことで自分には価値がない，役に立てる人間ではないという自己に対して否定的な感情をまずは抱いている。そのため，さらにその評価を下げるような出来事や，自己の評価の低下を脅かすネガティブな思考や感情，苦痛は自分のせいではなく，他者のせいとして捉えることで自己の評価を維持しようとする。しかしその評価も不安定なものであるため，日常生活において体験する出来事に対応して自己の評価は揺るがされる。そして自己の評価を維持することが困難となった場合に，よりその苦痛な感情を他者がもたらしたものとして捉えることによって被害妄想的観念が高くなると考えられる。この女性の「低・不安定」群の苦痛度が高いというのは，Raes & van Gucht (2009) の自己を脅かす思考や感情が起こった際に，自己評価を維持することができずに自尊感情が低下し，変動することで被害妄想的観念を強く確信する，すなわち自尊感情の変動性が被害妄想的観念の要因であるという研究知見をある程度裏付けたものと言えよう。

しかしながら被害妄想的観念における確信度得点では，どの群間においても有意な差が認められなかった。考えられている発生メカニズムでは，被害妄想的観念は自己の評価を下げうる脅威から自分自身を守るための機能であり，その脅威は他者が与えているものとして捉えることで生じる。そのため，自分が不当に扱われている，苦しめられているなどと確信することで，そこに伴う苦痛感が顕在化される。一旦，顕在化された苦痛感は，もはや他者が悪いと妄想的になっているため対処することが難しく，簡単に解消することができない。したがって苦痛度は確信度よりも被害妄想的観念の本質に近いものと言えよう。これらの点を踏まえると，どの群においても被害妄想的観念はある程度抱くが，そのことが苦痛なものとして顕在化する間には，自己評価のあり方が媒介変数として存在していると考えられることが本研究での新しい知見である。

最後に，男性ではRaes & van Gucht (2009) と同様の知見が得られなかったことについて考察する。男性は男性的な特徴として自信を身につけることが期待されており，自尊感情が高いことが望ましいとされている。そのため「低・不安定」群のような自尊感情が低い人で，自尊感情の変動が大きい場合には，一時的であったとしても自己評価が上がった場合には自分を価値ある人間として評価することができるため，自己に対する脅威があっても持ちこたえられる力を持つことができ，被害妄想的観念との関連が顕著に認められなかったと考えられる。一方，「低・不安定」群のような女性は，自信を身につけることが性役割に反するとされていること，大学という同年代の同性・異性が多く集まる場において，身体的評価が日常的なものとなり，低い身体的評価，ひいては低い自尊感情を持ちながらも，自分の自尊感情はこの程度のものと受け入れることができていると考えられる。そのため，自己に対する肯定的あるいは否定的な出来事があり，自尊感情が揺るがされる際には，

自己を脅かす思考や感情から自己の評価を維持するために被害妄想的観念を抱くことが考えられる。

3. まとめと今後の課題

本研究では，男性においては自尊感情が低くかつ安定している人が，女性においては自尊感情が低くかつ不安定な人が被害妄想的観念における苦痛度が高いことが示され，自尊感情の高さおよび自尊感情の変動性と被害妄想的観念との関連には，男女による違いがあることが明らかとなったとともに，被害妄想的観念が顕在化した苦痛となる際に，自尊感情のあり方が関与している知見が得られた。ただし本研究の７日間継続しての質問紙調査では，回収率が39.3%と低く，サンプルの偏りが生じていることも考えられるため，メールやインターネット等を利用し，より回答を得られやすいようにしたうえで本研究の知見をさらに確認する必要があろう。

また，本研究では自尊感情が被害妄想的観念に与える影響を想定して考察したが，実際に時系列を追って検討することはできていない。発生メカニズム解明のためには，自尊感情を高め，安定させることで被害妄想的観念が抱きにくくなるような介入プログラムの作成や実験を行う必要が今後はあるだろう。

＜引用文献＞

青木繁伸 (2009). R－クラスカル・ウォリス検定（plus多重比較）2009年８月21日 <http://aoki2.si.gunma-u.ac.jp/R/kruskal-wallis.html> (2011年11月２日)

阿部美帆・今野裕之 (2007). 状態自尊感情尺度の開発 パーソナリティ研究, 16, 36-46.

American Psychiatric Association (2000). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders* (4th ed., text revision). Washington, DC:Author. [高橋三郎・大野裕・染矢俊幸（訳）(2004). DSM-Ⅳ-TR―精神疾患の診断・統計マニュアル新訂版―　医学書院]

Appelbaum, P.S., Robbins, P.C., & Monahan, J. (2000). Violence and delusions: Data from the MacArthur violence risk assessment study. *American Journal of Psychiatry*, 157, 556-572.

東清和・岩崎容子・小林恵 (2002). 自尊感情（Self-esteem）に関する性差研究の動向　早稲田大学大学院教育学研究科紀要, 12, 1-15.

Bentall, R. P., Corcoran, R., Howard, R., Blackwood, N., & Kindman, P. (2001). Persecutory delusions: A review and theoretical integration. *Clinical Psychology Review*, 21, 1143-1192.

Bentall, R. P., Kaney, S., & Dewey, M. E. (1991). Persecutory delusions: An attributional theory analysis. *British Journal of Clinical Psychology,* 30, 13-23.

遠藤辰雄・安藤延男・冷川昭子・井上祥治 (1974). Self-Esteemの研究　九州大学教育学部門紀要, 18, 53-65.

遠藤由美 (1999). 「自尊感情」を関係性からとらえ直す　実験社会心理学研究, 39, 150-167.

Fenigstein, A., & Vanable, P.A. 1992 Paranoia and self-consciousness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 129-138.

Freeman, D.,Garety, P.A., Bebbington, P. E., Smith, B., Rollinson, R., Fowler, D., Kuipers, F., Ray, K., & Dunn, G. (2005). Psychological investigation of the structure of paranoia in a non-clinical population. *British Journal of Psychiatry,* 186, 427-435

Garety, P., & Hamsley, D. (1994). *Delusions: Investigation into the psychology of delusional reasoning*. Oxford University Press. [丹野義彦（監訳）(2006). 妄想はどのようにして立ち上がるが　ミネルヴァ書房]

市村（阿部）美帆 (2011). 自尊感情の高さと変動性の２側面と自尊感情低下後の回復行動との関連　心理学研究, 82, 4, 362-369.

Jaspers, K. (1913). *Allgemeine Pshychopathologie*. 5. Auflage. [内村祐之・西丸四方・島崎敏樹・岡田啓蔵（訳）(1953). 精神病理学總論　岩波書店]

加藤隆勝・斉藤誠一・瀧野揚三 (1987). 青少年のself-esteem測定の試み　筑波大学心理学研究, 9, 73-86.

Kernis, M. H., Cornell, D. P., Sun, C. R., Berry, A., & Harlow, T. (1993). There's more to self-esteem than whether it is high or low: The importance of stability of self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology,* 65, 1190-1204.

Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Barclay, L. C. (1989). Stability and level of self-esteem as

predictors of anger and hostility. *Journal of Personality and Social Psychology,* 56, 1013-1022.

Kernis, M, H., Grannemann, B. D., & Mathis, L. C. (1991). Stability of self-esteem as a moderator of the relation between level of self-esteem and depression. *Journal of Personality and Social Psychology,* 61, 80-84.

笠原　嘉・藤縄　昭 (1978). 妄想　現代精神医学大系 3A　精神症状学Ⅰ　中山書店

Lyon, H. M., Kaney, S., & Bentall, R. P. (1994). The defensive of persecutory delusions: Evidence from attribution tasks. *British Journal of Psychiatry*, 164, 637-646.

森本幸子・丹野義彦・坂本真士・石垣琢磨 (2002). 被害妄想的観念に関する素因ストレスモデルの検討　性格心理学研究, 11, 2-11.

中間玲子・小塩真司 (2007). 自尊感情の変動性における日常の出来事と自己の問題　福島大学研究年報, 3, 1-10.

塗師斌 (2005). 自尊感情と性格および感情の関係　横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅰ, 教育科学, 7, 107-114.

大渕憲一 (1993). 人を傷つける心　サイエンス社

Paradise, A. w., & Kernis, M. H. (2002). Self-esteem and psychological well-being: Implication of fragile self-esteem. *Journal of Social and Clinical Psychology,* 21, 345-361.

Peters, E. R., Joseph, S. A., & Garety, P. A. (1999). Measurement of delusional ideation in the normal population: introducing the PDI (Peters et al. Delusions Inventory). *Schizophrenia Bulletin*, 25, 553-576.

Raes, F., & van Gucht, D. (2009). Paranoia and instability of self-esteem in adolescents. *Personality and Individual Differences,* 47, 928-932.

Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image.* Princeton, NJ: Princeton University Press.

丹野義彦・石垣琢磨・杉浦義典 (2000). 妄想的観念の主題を測定する尺度の作成　心理学研究, 71, 379-386.

佐久間路子・無藤隆 (2003). 大学生における関係的自己の可変性と自尊感情との関連　教育心理学研究, 51, 33-42.

Thewissen, V., Bentall, R. P., Lecomte, T., van Os, J., & Myin-Germeys, I. (2008). Fluctuations in self-esteem and pararnoia in the context of daily life. *Journal of Abnormal Psychology,* 117, 143-153.

山本眞理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究, 30, 64-68.

山内貴史・須藤杏寿・丹野義彦 (2007). 日本語版 Paranoia Checklistの作成および信頼性・妥当性の検討　パーソナリティ研究, 16, 114-11

山崎修道 (2006). 妄想的観念の発生・維持に関する臨床心理学的研究　東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系博士論文